



え・城谷俊也

お金の気持ちになっ てみる

「成」 功者は長財布を使っている」という話を経営者モーニングセミナー（以下MS）で聞いたAさん。早速、長財布を購入しました。しかも「財布の値段の二倍が自分の年収に比例する」という体験談を聞き、奮発して高価な財布を買い求めたのです。（よし、これで年収ウン千万円だな）と、意気揚々とお店を後にしました。

しかし、その後一年間、何の変化もないままに時間が過ぎていきました。いつも財布の中にあるのは数枚の千円札と、詰め込んだ領収書、買い物たびに増え続けるポイントカードの類です。

ある時、同じ時期に同じような長財布を購入したBさんと、財布談義に華が咲きました。すると、Bさんは、不思議とお金まわりが良くなったと言っています。

Bさんの財布には、新券の一万円札が伸び伸びと収まっています。領収書やレシートの類はなく、いつも使うカードが数枚入っているのみです。それでも、これといった困ることはないと言います。

これまで、会社の資金繰りについて悩み、相談をしていたのはBさんのほうでした。Aさんにすれば、彼にいったい何が起こったのか、不思議でなりません。「何か特別な方法で儲けているのか」と探ってみたのですが、特にそうしたことはなさそうです。

いろいろと話をするうちに、あの時のMSで聞いた話の受け止め方が違いがあることに気づいたのでした。その日のMSで、講師は「万人幸福の葉」の十一条、「物を象徴し、すべての財を具象したのが金銭である。金銭は物質の中で、最も敏感な生き物である。金銭はこれを大切にする人に集まる」という一節に触れました。そして、「ポイントはお金の気持ちになっ

て扱っているかどうかです」と述べました。Aさんは、「いい財布を購入することで物事は好転する」と受け止めて、すぐに長財布を購入したものの、形だけに目が向いて、「お金の気持ちになっ

て扱おう」という本質が抜け落ちていたのでした。

一方Bさんは、買い物に行くといつてらっしゃい。世の中のために働いてこいよ」と喜んで支払

い、古いお札が手元に来た時には「お疲れさま。伸び伸びと私の財布で休んでください」と、心の中で話しかけていたと言います。また、取引先への支払日が近づくと、以前は憂鬱になっていたのが、（同じ支払うのなら、喜んで見送ってやろう）と、気持ちを切り替えて支払っていたのです。

「こうした実践を続けるうちに、自社の商品や社用車も以前より大切に扱うようになった」と語るBさん。物を創るのも扱うのも、すべては人であり、わが社があるのは社員、お取引先、お客様あつてのことだと、感謝の念が持てるようになったと言っていました。Bさんの話の中に、Aさんは、倫理実践のポイントを見いだし、「人が徳の高い人のもとに集まるように、物もまた少しでもよく働かしてくる人のところ